

## 英語の授業におけるアクティブラーニングのあり方

### ー 生徒の着実な英語力向上を目指して ー

教科教育高度化分野(15220914) 木 村 薫

グローバルな人材の育成が求められている今、英語教育は大きな転換を迫られている。2020年の東京オリンピックをひとつの目標とし、文部科学省は生徒の着実な英語力向上プランを策定した。本研究では世界で求められる21世紀型スキルの習得やグローバル化に対応した英語教育を考えた時、生徒の着実な英語力向上を目指す上で大切にすべき授業はアクティブラーニングであると考え、そして英語教師の役割をファシリテーターへと転換する必要性を提案するものである。

[キーワード] 英語教育, アクティブラーニング, ファシリテーション, 学びの共同体, 協同学習

#### 1 問題の所在と研究の背景

##### (1) 問題の所在

かつて生徒の力を伸ばしきれなかった経験がある。その学級は中間層が不在であり、生徒の英語力は上位層と低位層に分かれていた。上位層の生徒たちは確かに英語力を向上させた。しかし低位層の生徒たちは課題のドリル活動等に励んだにもかかわらず、十分に英語力をつけることができなかった。そこで必要だった学びとは、どのようなものだったのだろうか。

英語は、「苦手」と言われやすい教科である。筆者の課題意識は、「どうしたら生徒の苦手意識を克服し、英語の授業における生徒の落ちこぼしをなくすることができるか」ということにもあった。英語は言語であり技能であるという特性から、得意不得意が生じやすい。しかしそこから脱却し、クラスの生徒全員に達成感のある英語の学びを実現し、着実に英語力を向上させるためにはどうしたらいいか。それが本研究の問題の所在である。

##### (2) 研究の背景

英語教育は大きな改革を迫られている。国際的なグローバル化の流れを受けた日本人の英語力向上を推進する動きは、2020年の東京オリンピックを見据えて加速度を増している。文部科学省(2015)は生徒の着実な英語力向上を目指し、GOAL2020を設定して明確な達成目標とした。グローバル人材の育成に向け、英語教育の質的向上が、多方面で叫ばれている。

一方で英語教育は批判される。教科教育のひとつでありながら、英語教育だけが取り出され、批

判にさらされる傾向がある。しかしそれは、英語教育が日本の未来を切り開く上で大いに期待されていることを意味する。だからこそ、グローバルな日本人としての英語力の着実な向上を目指し、質の高い英語の授業を提案する必要があると思われる。

#### 2 先行研究の検討

##### (1) 英語力を向上させる英語学習とは

教室のすべての生徒が、楽しみながら効果的に英語を学ぶにはどうしたらよいのだろうか。文部科学省(2013)は、国際的なグローバル社会や知識基盤社会に向かう流れを受け、21世紀型能力の育成を提案している。1996年の中央教育審議会第一次答申で初めて示された「生きる力」が、OECDのいう「キー・コンピテンシー」の先取りだということも示されている。そしてその育成は英語教育にも求められている。またこれまで授業や評価等で用いられてきた「思考・判断・表現」という学びの過程を、「習得」「活用」「探究」という文言に変え、さらなる活用型の学びの実現を訴えている。それらを実現し、その成果を検証するためにパフォーマンス評価等を重視する必要性も強調している。アクティブラーニングに代表される大学教育改革も、その延長線上にあると考えられる。

また、江利川(2012)は知識基盤社会に対応した協同的な学びを強調している。それは教育における競争を脱却し、共感的人間関係に支えられた協同によってより深い学びを引き起こそうとするものである。教師は、どうしたらよりよく教えられ

るか、ではなく、どうしたらよりよい学びを引き起こせるのか、ということを授業づくりの基本とすべきではないだろうか。

## (2) 「学びの共同体」

### ① 「学びの共同体」とは

「学びの共同体」は佐藤(2012)の提唱する学校改革の考え方である。カリキュラムを「プログラム型」から「プロジェクト型」へと移行すること、一斉授業から協同的学びへ転換すること、学校の機能を地域文化へと転換することの三つを土台とし、21世紀型の学校を実現しようとする。授業では一斉授業の形から脱却し、探究型の授業を展開する。そこでは「子どもはできる」という教師の信じる力が重要になる。

「学びの共同体」はこれから私たち教育者が大切にすべき視点である。「学びの共同体」を標榜する研究授業では、すべての生徒が傍観者になることなく学びの主体として授業に参加していた。学びは個で起こる。しかしその相互扶助として有能な他者である仲間を活用する。そこには相互に学びの深まりが起こるのである。

英語が言語である以上、そこにコミュニケーション活動は不可欠である。「学びの共同体」も共感的人間関係を土台としており、少人数を基盤とした協同的な学びは英語の授業においても効果をあげることが期待できる。

### ② 先行事例における「学びの共同体」の課題

ところが英語の授業で「学びの共同体」を実践しようすると、うまくいかないことに気づいた。先行事例で行われている実践が、探究型学習ではなく、パターンプラクティスに陥る傾向が見られるのである。原因は次のように分析する。

第1に英語が言語であるという点である。学びの共同体で大切にしている探究型の学習とは、生徒同士が対話の中で課題解決を求めていき、その結果として学びが深まるという学習である。ここで大切なのは、その対話が日本語で行われる、ということである。英語による対話を、という人もいるが、中学校英語で習得するのは英語母語話者の幼児期程度の英語力である。中学3年までに学習する英語で、日常生活程度の会話は可能だといわれている。しかしそこに至らない段階では、思い通りに対話するのは難しい。

第2に、英語が技能であるという点である。国語の授業では主人公の思考をより深く理解しよう

と話し合いが行われる。理科では実験結果を持ち寄って大きな課題の答えを求める。それでは英語では何を持ち寄るのだろうか。少人数のグループ活動は日常的に英語の授業で行われている。しかしそれは練習のためである。技能を習得するためには練習が必要であり、それを協同で行うのは有効である。しかしあくまでそれは協同的な活動の側面が大きく、生徒により深い学びを起こす活動とはいえない。

中央教育審議会の外国語専門部会委員であった金谷憲も学びの共同体の英語教育における難しさについて指摘している<sup>1)</sup>。学びの共同体は確かに効果的な理論である。しかし英語教育にそのまま応用するには課題も多い。

## (3) アクティブラーニング

### ① ラーニングピラミッド<sup>2)</sup>

ラーニングピラミッドとは、学習活動と学習定着率の相関関係を示したものである。

小林(2012)や石川・小貫(2015)でもその有効性が示されており、受動的な学びから主体的な学びへの転換の重要性が述べられている。(図1参照)

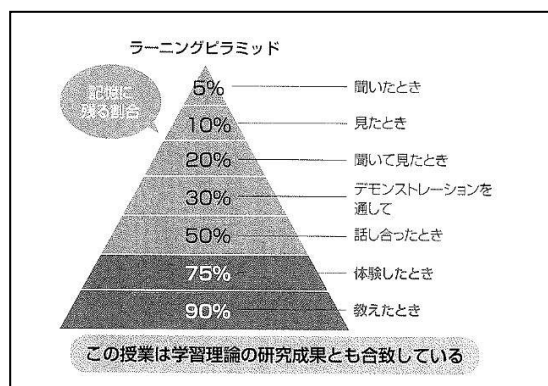


図1 ラーニングピラミッド  
(出典：小林(2015:37))

ラーニングピラミッドによれば、参加型の学習を通して、これまで授業を「受けていた」生徒を、授業で「主体的に学ぶ」生徒へと転換することが求められている。

### ② アクティブラーニング

これまで述べてきた現状を鑑み、筆者が英語の授業で有効に働く可能性を感じたのが、アクティブラーニングである。英語が第2言語である以上、「少人数での対話を重視した学び合い」を基調とする「学びの共同体」を英語の授業で実践するの

は難しい。溝上(2014)は、アクティブラーニングは能動的な学習であり、アクティブラーニング型授業とは学習者にアクティブラーニングが起きることを含む全ての授業形式であるとしている。

一斉授業で最もアクティブなのは誰か。教師である。一斉授業では先生劇場ともいえるような学習形態で、教師の一人舞台が繰り広げられている。授業の主役は誰か。無論生徒である。私たちは生徒が主役となる授業を考える必要がある。

### ③英語教育におけるアクティブラーニング

アクティブラーニングを溝上(2014)の定義で考えれば、英語の授業においてアクティブラーニングを取り入れていない授業はないだろう。英語はコミュニケーションのための技能である。生徒が主体となってペアやグループで英語の表現を練習するのは、授業における日常的な学習活動である。

しかしここでさらに考えたいのは、生徒を学びの主体としたアクティブラーニングである。山本(2015)は教師の役割について、教える存在から学習者の自立を支援するファシリテーターに変化する必要を述べている。授業をつくる視点を「どう教えるか」から「どう生徒が学ぶか」「どう学ばせるか」という方向に転換する必要がある。そこには4技能を統合的に育成するためのパフォーマンス評価などの視点が生じると考えられる。

## 3 実践

### (1) 個々の到達度目標の設定(教職専門実習Ⅰ)

教職専門実習Ⅰでは、教室の学力格差に対応し、生徒にアクティブラーニングを仕組む方策として、個々の習熟度により異なる到達目標を設定することを考えた。CAN-DO リストなどに基づく目標設定に、個に応じた「級友の力を借りて」や「教師に助けをもらいながら」といった手段を付与することで、一人ひとりが学びの主体となるべく、個別の到達目標を設定し、学力格差に対応しようと考えたのである。

すべての生徒に到達目標を達成させるという視点は有効だと考えられた。実際、授業の中で一部の生徒に補助プリントを配布するなど、これまでも実践例はあった。それによって生徒の学びが主体的になる傾向も見られた。

しかし、常に一対複数で教師が生徒の学びに対応することは難しい。教室で起こる学びを想定し、

教材研究の段階で教材や活動をコーディネートすることはできる。しかし授業の中で同時に起こる想定外の状況に、教師が一人で即座に対応することは難しかった。

### (2) 生徒が主役の授業(教職専門実習Ⅱ)

教職専門実習Ⅱでは、ある中学校3年生の英語の授業を見せていただいた。そこでは確かにアクティブラーニングで英語の授業が行われていた。学びの主体は生徒であった。しかしそれは探究型学習でもプロジェクト型の学習でもなかった。インタラクティブラーニングともいえるであろうか。とにかく教室のすべての子どもたちが、傍観者になることなく英語の授業に取り組んでいたのである。授業における教師のあり方が、明らかに他とは異なっていた。教師は教壇に居続けることなく、生徒との距離を図りながら教室の中を動き続けた。そして生徒の気づきを促し、生徒の学びで授業が進んでいくのである。

それは、ファシリテーターの役割なのだと気づいた。この授業では常にグループ活動が行われているわけではない。しかし生徒全員が主体的に学習している。そして非常に高い英語力を身につけていた。生徒を対象としたアンケートを見ると「かつては英語が苦手だったが、この授業をきっかけとして英語が好きになった」という回答が多く見られた。そこにあったのは教室の全員が授業に主体的に参加し、英語を楽しんでいる実践だったのである。

### (3) 英語の授業の可能性(公開授業研究会)

公開授業研究会に参加し、多くの授業を見せていただく中で気づいたことがある。それは英語と技能教科の類似性である。英語の授業は明らかに他教科の授業とは異なる。それは英語が技能であるために他ならない。つまりトレーニングが必要なのである。

しかし同時に、英語はコミュニケーションのツールである。そのため、授業の中で協同的な活動は起こしやすい。ただそれを単なる活動で終わらせることなく、アクティブラーニングの学びへと高める視点が必要である。そのために教師は、ファシリテーターになることが求められるのである。

## 4 考察と課題

### (1) ラーニングピラミッドから

先述の通り、ラーニングピラミッドは学習活動

を考える時、大切にすべき概念だと考える。ところが中学校英語において、「他の人に教える」という行為には難しさを感じる。それが共感的人間関係を阻害しかねないからである。その点が、筆者が「学びの共同体」をそのまま英語の授業に導入できないと感じた理由でもある。しかし「他の人に伝える」ことは可能である。技能としての英語力は未熟であっても、伝えたいと思う気持ちとその内容を高めることはできるのではないだろうか。

## (2) ファシリテーターとしての教師に

石川・小貫(2015)は facilitate を「容易にする、手助けする、促進する」ことと捉え、教育においては子どもたちが既に持っているものを引き出すことだとしている。一斉授業における教師は teacher, つまり「教える人」である。授業の主角を教師から生徒にシフトするためには、教師が facilitator になることが必要だと思われる。

さらに石川・小貫(2015)は教育現場が求めるファシリテーションとして、「自分を集団で活かす力」「自分が集団を活かしていく力」「総体として集団が生きていく力」を育む姿勢を大切にしないといけないと述べている。相手の力を信じ、相手の持っているものを引き出すためには相手を知ることが不可欠である。そのためファシリテーションで大切にするのは傾聴する姿勢である。無論、授業の中で生徒を見ていない教師はいないが、講義型の一斉授業では教師が聴くことよりも話すことに重点を置いているのは明らかである。そこには教師による傾聴の視点が欠けていたのである。

教師が生徒を傾聴するための手立てとして、最近はこの字型の学習形態が増えている。しかし傾聴者としてのファシリテーターを考える時、もうひとつ大切にしたいことがある。それは生徒自身も傾聴者としてファシリテーターの資質を育てることである。佐藤(2011)も聴きあう環境をつくることと高いレベルに挑戦させることの大切さを指摘している。

英語の授業においてだけでなく、様々な教育の場面で、「話を聴くことのできる」生徒を育てることが、21世紀型スキルを持つグローバルな人材を育てるために大切にされるべきであろう。

## (3) アクティブラーニングを英語の授業に

言語習得の初期段階である中学校英語の教室において、すべての授業をアクティブラーニング

で実践していくことは難しいだろう。しかし 21世紀型スキルは未来を生きる子どもたちに必要な能力である。そこに求められる英語力とは、いわゆる受験英語とは一線を画す。答えのない問いに協同の学びの中で答えを見つけていくという経験を、ぜひ生徒には英語の授業の中でも体験させたい。

## 注

1) 2015年10月10日にフォレスト仙台で行われた第6回 ELPA 英語教育セミナーにおいて、筆者の質問に対しての返答。

2) National Training Laboratories が提案したラーニングピラミッドは、多方面で引用されるが原典がない。本稿では、小林(2015)から引用した。

## 引用文献

江利川春雄(2012)『協同学習を取り入れた英語授業のすすめ』, 大修館書店。

石川一喜・小貫仁(2015)『教育ファシリテーターになろう! グローバルな学びをめざす参加型授業』, 弘文堂。

小林昭文(2015)『アクティブラーニング入門』, 産業能率大学出版部。

溝上慎一(2014)『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』, 東進堂。

文部科学省(2013)「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会-論点整理-」, [http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2014/07/22/1346335\\_02.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2014/07/22/1346335_02.pdf) (最終閲覧日 2016年1月13日)

文部科学省(2015)「生徒の英語力向上プラン」, [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/\\_icsFiles/afieldfile/2015/07/21/1358906\\_01\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2015/07/21/1358906_01_1.pdf) (最終閲覧日 2016年1月23日)

佐藤学(2011)「『協同的な学び』で英語の学びの質を変える」, ラボ教育センター(編), 『佐藤学内田伸子・津由紀雄が語ることばの学び、英語の学び』, ラボ教育センター, pp. 119-147。

佐藤学(2012)『学校を改革する』, 岩波書店。

山本崇雄(2015)『はじめてのアクティブ・ラーニング! 英語授業』, 学陽書房。